

〈文献紹介〉

池尾愛子編「日本の経済学と経済学者」

日本経済評論社 1999年刊

本書は戦後日本の経済学について客観的な研究が行われた一つの成果である。国際比較をめざして、制度的特徴を明らかにし、豊富なデータや表やグラフの形で示すほか、数量分析も試みている。経済学の国際化を柱にして、日本の経済学者たちの学術研究活動と政策形成への関与を制度面と数量面から捉えた研究書といえる。

学術研究に関する数量分析には、日本経済学会連合、学術情報センター、アメリカ経済学会のデータベースが利用された。文献情報としては、経済資料協議会が蓄積してきたデータベース「経済学文献季報」およびこのオンライン版 NACSIS-IR の経済学文献索引とアメリカ経済学会の Econlit が活用された。対照表からもわかるように、日米で文献分類の仕方が大きく異なることには注目すべきである。さらに、戦前と戦後における制度変化や、戦時中や終戦直後の経済学者の追放、高度成長期以降の制度変化も調べている。

経済政策に関連する制度については、「経済計画」や経済審議会の構成メンバー、上級公務員の試験科目や研修制度が検討された。そのほか、中山伊知郎と東畑精一氏の活動が詳細に論じられ、高度成長期以降の官僚と経済学者との白熱した議論も興味をひく。

序 章 戦後日本の経済学（池尾愛子）

第Ⅰ部 日本の経済学者と学術研究

第1章 学術研究と国際化（池尾）

第2章 経済学の学術体制（八木紀一郎）

第3章 経済学者の国際貢献（川俣雅弘）

第4章 マルクス経済学（赤間道夫）

第Ⅱ部 日本の経済学者と経済政策

第5章 経済学者と経済政策（池尾）

第6章 行政官僚制と経済学（八木）

第7章 経済再建から高度成長へ（美濃口武雄・池尾・西沢保）

第8章 対外自由化と「産業構造政策」（野口旭）